

中世説話集

説話とは、字の示す通り、「話すこと」「ものがたること」であるが、一般には、神話、伝説、昔話などの総称である。説話文学は、広義には、上代の叙事文学などその中に、説話を含むすべてのものを指すが、狭義には、多くの説話を収集した説話集のことである。今昔物語集、宝物集、沙石集などを紹介したい。

(1) 今昔物語集

写本十五冊（三十一巻中二、十、十七、二十二欠）（黒川文庫）  
美濃判 十行書き  
平仮名文 奥書なし 朝田家蔵書、福田文庫蔵印あり  
全三十一巻（うち巻八・十八・二十一欠）、作者未詳の説話集で、書名の由来は、「今は昔」に始まり、「となむ語り伝へたるとや」で終る説話様式から、つけられたという。巻一、五が天竺（インド）、六、十が震旦（中国）、十一、十三十一が本朝（日本）の説話、本朝の部は、十一、二十が仏法、二十一、三十一が世俗の説話に分けられ、話数約一千百有余と、量も歴大である。世俗部には民間説話として、文学的価値の高いものが多いといわれる。

(2) 撰集抄

版本六冊（三巻各上、下） 半紙判 絵入 文化七年（一八一〇） 大坂  
（常磐松文庫）  
奥田弥助板 外題「絵入再刻西行撰集抄」  
古来より西行作といわれるが、未詳。巻数は、九品浄土に準じ、全九巻、華嚴経の八十随好に擬して、八十条とする。発心談、遁世談、往生談が大部分で、仏教思想の影響のつよい説話集である。

(3) 宝物集

平康頼記 美濃判 九行書き 元禄六年（一六九三） 京都 梅村三郎兵衛  
板 漢字片仮名混り文 酒井忠固蔵書印あり  
一巻本・二巻本・三巻本・六巻本・七巻本・九巻本と諸本により広略がある。平康頼が帰洛した治承三年（一一七九）頃の成立といわれる。仏教説話が、ほとんどであるが、編者の主観的批評意識が強く、単なる説話の羅列でないところが特色である。

(4) 沙石集

無住著 美濃判 十二行書き 漢字片仮名混り文 「元和二年（一六一六）刊」の復刻本  
無住が、弘安二年（一二七九）に起稿し、その後しばらく放置し、弘安六年（一二八三）再び書きついで、脱稿したと、「序文」及び「識語」にある。全十巻中、五巻までは、あまり異同はないが、六巻以後、諸本により異同が多い。内容は、主に仏教説話であるが、種々の滑稽譚や猥雑な話に異彩があり、後世の笑話の祖ともなるものが数多くある。

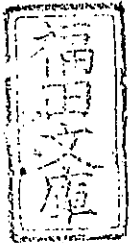
（常磐松文庫）

（黒川文庫）

○ 朝田家蔵書（岸本由豆流蔵印）



○ 福田文庫（福田敬園蔵印）



○ 酒井忠固蔵書印

